

会報

第67号

全国公立学校退職教頭会

あなたは、今、
何をしていますか？

全国公立学校退職教頭会 会長 山浦 朝日

平成三十年度の代議員会は、年一度の大切な交流の場として、九州ブロック大会と併せる形で、五月十六〜十七日に佐賀市で行われました。各支部の示唆に富む活動状況が報告され、新年度における活動の貴重な参考となりました。

全国公立学校退職教頭会の代議員会は、支部ローテーションを基本として開催されていますが、ローテーションのねらいは、開催県の歴史を知り、風物に触れ、教師としての見識を高め、資質を向上させることにあります。

今回訪れた佐賀の地は、かつて、鍋島藩と呼ばれ、その十代藩主鍋島直正公は、藩校「弘道館」の規模を拡張し、「素読」による基礎基本の徹底と「問答談話」による真理を探究する志の育成に努め、人づくりを進めました。その成果は、維新後の政界に、大隈重信(総理大臣)・副島種臣(内務大

臣)・江藤新平(司法省長官)・佐野常民(農商務大臣)・日本赤十字社の創始者)らが活躍したことに現れています。

平成三十年は、奇しくも、「明治維新百五十年」にあたり、佐賀市では、『肥前さが幕末維新博覧会』が行われていました。代議員会二日目の「自由研修」で、私は、『幕末維新記念館』を訪れてみました。そこで、こんな言葉に出会いました。

その時、日本は佐賀を見ていた。

佐賀は世界を見ていた。

あなたは、今、何をしていますか？

世界を見ていた佐賀は、諸外国の技術力の高さに驚き、それに追いつくことが出来なければ、日本という国が、阿片戦争によつて植民地化された清国と同じようになってしまふとの怖れを抱きました。「反射炉」の建設も「凌風丸」の建造も、直正公の揺ぎ無い信念と熱い想い、そして、それに応えた技術者たちの不屈の努力があったからこそのものでしょう。「江戸時代」とか「幕末」という言葉には、ともすれば、古さや遅れのイメージを感じてしまうものですが、佐賀の地には、時代の先端があつたのだと知りました。この先人たちの先見先取の気風に触れて、私は、座禅の警策に打たれたような気持ちになりました。

代議員大会では、『生涯現役の心』を持ち続けましょう、とのあいさつを続けていますが、それは、日本の教育の今と将来を担う子どもたちの今を見守り続けましょう、と同義語だと思っています。

具体的な教育問題に話題を換えてみましょう。

私の目は、こんなところを見ています。

東京都で行われた副校長選考(B選考)の昨年度データがあります。小学校の合格予定者数1159名。受験者数224名。中学校の合格予定者数1115名。受験者数64名。中学校では、一倍以下です。管理職を目指す先生が少なすぎます。それに加えて、平成二十七年には、25名の副校長が希望降格をしています。教員採用試験のデータもあります。平成26年度の受験倍率9.5倍。平成30年度の受験倍率5.7倍。教職を目指す若者が減ってしまいました。

「百年の計」と言われるように、教育は、長期展望に立つて行われる必要があります。しかし、現状のデータを分析すれば、これでは、百年先が見えないように思います。私たち退職教頭・副校長は、『無事退職できたので良かった』と考えるのではなく、『教職経験者として、私たち退職者にできることは何か』と問いかけるべき時代にいるのではないのでしょうか。

現職時代の功労の証としての『叙勲』を要請する活動をやめてしまう気持ちはありませんけれど、同時並行的に、「教育の今」に関わる、提言を含めた要請行動を行うことも、全国公立学校退職教頭会の役目ではないのかと考えてしまいます。

平成三十年度
全国公立学校退職教頭会
 代議員会「佐賀大会」

平成三十年五月十六 十三時十分〜十七時

会場 ホテルグランデ

はぐくれ

開会行事

- 一 開会の言葉
- 二 国歌斉唱
- 三 会長挨拶



- 四 歓迎の言葉
- 五 来賓祝辞
- 佐賀県教育委員会

教育長様



- 佐賀市教育委員会 教育長代理学校教育課長様
- 六 来賓紹介
- 七 閉会の言葉

記念講演(要約)

演題「幕末の賢君 佐賀藩主

鍋島直正公の人づくり」

公益財団法人鍋島報効会

徳古館主任学芸員様

十代佐賀藩主鍋島直正公(一八一四〜七二)は、江戸時代後期において、藩政を充実させ、成長させたリーダーとして知られている。



当時、藩士子弟の教育は、主に藩校弘道館を通じて進められ、直正公の頃は、必ずしも活発ではなかった。そこで、藩主十一年目に弘道館の移転を実現させて敷地を三倍に拡張。やがては学生数千人クラスのマンモス校となった。

こうした改革の背景には、佐賀藩士古賀穀堂の考えがある。側近として支えた穀堂は、重臣や藩の幹部たちは、小役人の見識で仕事をしており、たとえ豪傑才智の人材があっても自己防衛のために、妬むようになり、抜擢しないと批判をした。そして「学問を通じて古今の真理を理解するようにすること」を提言した。

直正公はこれを受け、弘道館に赴いて藩校トップにあたる頭人たちに、教育を通じて、真理を求め才能を磨く必要性

を強調した。「自己の智徳を伸ばすためには、様々な論談を聞いてポイントには質問を加え、それに普段の読書と実際に生活上で感じた疑問点などを総合して、工夫・研究を加えなければ、知識というものは増進しないと、双方方向に議論し、学習内容を自発的に深める体験を重んじた。アクティブラーニングと通じる学習を重視していたことがわかる。

ところが当時の佐賀藩では、学齢期の子弟を教育し、いくつらい人材を学校が輩出しても、藩校卒業生の進路は原則としてひとつしかなかった。それは、全国で活躍する人材の育成ではなく、佐賀藩の役人になることだった。

そこで直正公は重臣たちに「身分の上下や立場の違いを越えて一体となって融和し、憂いは偕に憂い、楽しみは偕に楽しみ、藩内が一丸となり、藩が永続する運営をしよう」と呼びかけた。こうした正面からの正論に加え、さらには藩士を個別に別荘に招待するなど細やかな配慮もみせた。こうして直正公は、学校を通じて個人の学力を高め、議論する風潮を醸成することで組織力を高め、州の、いち外様大名の治める藩が全国屈指の雄藩となって飛躍する基盤を築き上げたのである。



日新小学校の校庭端にある反射伊勢とカノン砲

平成30年度 活動計画

・定例役員会（毎月1回実施） ・臨時役員会（必要に応じて実施）

月	活 動 内 容	備 考
4	定例役員会 ・代議員会佐賀大会議案書の校正 ・文部科学省・国会への要請 ・教育徒然集（第3集）の校正 ・代議員会役割分担の確認 ・その他	
5	定例役員会 ・代議員会佐賀大会議案書の作成、送付 ・会計監査の準備 ・代議員会佐賀大会準備 ・教育徒然集（第3集）の校正 ・その他	
6	定例役員会 ・代議員会佐賀大会の総括 ・会報67号の編集 ・教育徒然集（第3集）の発行 ・各部より ・その他 臨時役員会 ・教育徒然集の作成 ・発送	
7	定例役員会 ・会報67号の校正 ・各部より ・その他	
8	臨時役員会 ・会報67号の作成、発送	
9	定例役員会 ・会報67号の総括・次年度代議員会開催県について・各部より	
10	定例役員会 ・再来年度代議員会開催県について ・各部より ・その他	
11	定例役員会 ・本部役員組織について ・再来年度代議員会開催県について ・各部より ・会報68号について ・その他	
12	定例役員会 ・本部役員組織について ・本部役員推薦委員会の設置 ・各部より ・会報68号について ・その他	
1	定例役員会 ・本部役員の補充 ・会報68号の校正 ・教育徒然集（第4集）の編集 ・各部より ・その他	
2	定例役員会 ・会報68号の校正 ・教育徒然集（第4集）の編集 ・各部より ・代議員会秋田大会開催要項の校正 ・その他	
3	定例役員会 ・代議員会秋田大会議案書の校正 ・会報68号の校正 ・教育徒然集（第4集）の校正 ・各部より ・その他 臨時役員会 ・会報68号の作成・発送	

支部活動報告

秋田県

秋田県公立学校退職教頭会

代議員 豊島鈴子

小規模退職教頭会の組織を生かして

一、組織の維持

人口減に伴う少子化減少が学校統廃合に繋がり、各地区の教頭退職者が増えてきている。退職後の五年間は、再任用あるいは非常勤講師など個人が選択し、学校との繋がりの中で真剣に取り組んでいる。現役時代よりは、気持ちの上では時間的な余裕ができ退職教頭会の主旨に賛同して入会してくださる方が少しずつではあるが増え、地区の理事や役員に若手後継者ができてきている。

(一)入会勧誘

年代の若い会員が地区の仲間を集める積極的な活動をすること会員増に大きく繋がる。

H三〇・三 教頭退職者二二名に「ご苦労様でした」と労いの心を込めて手紙を送る。

各地区の理事や役員が学校訪問をして直接手渡す。学校訪問ができない場合は現職時代苦労を共にした後輩に労いの言葉を添えて、地区の役員が送るなど誠意を持って

活動する。みんなが苦労して仲間を集めることで地区の絆が深まり喜びに繋がる。

H三〇・三 入会のご案内は、事務局で新聞発表後郵送している。

H三〇・五 慰労会の案内は、組織推進委員が企画運営を担当している。

(二)現職教頭会との連携を図る。

今年度の交流は、四回行った。現職教頭会長との懇談
三回(五月・八月・三〇) 一月)

九月一二日の現職教頭会理事研修会に出席・発表した。研修会で各地区の理事の名簿を交換した。一月一七日には二九年度にご退職なさる教頭先生の把握をいたしたく

ご協力をお願いした。時期になったら早速退職教頭会から現職理事の方に電話した。とても親切に対応してくださった

各地区の現職教頭会との日常的な繋がりを話し合い、計画的に懇談する機会を設定していきたいと考えている。

教頭会長談

私は、皆様と出会う初めて「教頭会という会」があることを知った。様々な機会を捉えて「退職教頭会」の存在を訴えていってほしい。私からも機会を捉えてその存在を訴えていきたい。これからも連携を大事にしたい。

二、会報

年一回、従来のサイズB五からA四に変更、会員のみならずの教育提言や生き甲斐活動などの投稿は、本会の充実発展に貢献している。二九年度の会報発行は、経費節約のために編集から製本まで会員の手にするものとした。

三、学校訪問

地域の学校の研修として現職教頭時代の仲間である学校

長へ学校訪問のお願いをし、地域の学校開放日に参観している。校長先生はじめ教職員・児童生徒のみなさんから歓迎を受け、校長先生から学校経営のお話をいただき懇談する。学校訪問は、地域の学校と退職教頭会との連携活動の一つであり、有意義な研修活動にも繋がっている。

四、県市教育委員会要請訪問

(一)教育支援活動について

二九年度は、地域ぐるみで子どもを育む秋田県・市町村の学校地域を結ぶ仕組づくりに参画したく、積極的に

訪問の要請をした。訪問を重ねて行くうちに退職教頭の活動を理解していただき、日常的な連携ができるようになってきている。また、地区会員の社会貢献・教育支援活動が見えてきた。

(二)叙勲要請活動

本会ができる要請活動を継続するために叙勲要請活動委員会を特設(二七年度)

秋田県選出国会議員への要請訪問(二八年五月二六日陳情書持参)

二九年度 全

退教会長名による

全国表彰(感謝状

贈呈三名)を御願

いした。二九年度

の教育委員会要請

活動は、叙勲要請

にも繋がっていく

と実感している。



東京都小

東京都公立小学校退職教頭・副校長会

代議員 野沢 宏治

一 会員数 四四名(平成二九年度)

二、組織の維持

(一) 会報(年二回発行)

(二) 現職の副校長さんの大部分は、退職会の存在を知らない。そこで、現職副校長会の五月の「総会」、二月の「研究発表会」に参加し、退職会の存在を知らせる。また、七月頃に「現職副校長幹事会」に参加し、各地 区幹事の副校長さんを通して各支部の副校長さんに退職会の存在を知っていただく。

(一) 毎年二～三名の入会者はあるが、退職後五年間は再任用や嘱託員として週四日は勤務している。そのため、会の行事等に参加できない。

三、主な親睦会(平成三〇年度)

(一) 新会員歓迎会・忘年会・新年会・潮干狩り

・歴史探訪グルメ旅(浄土宗九品佛、浄真寺)

・新春初富士、初温泉

四、入会のお誘い。

(一) 二三月に退職される副校長さんの勤務校に葉書で入会案内を送付する。

五、運営資金

(一) 年会費 五〇〇〇円ですが、毎年一〇数名の未納者がある。

(二) 事務局(現職副校長会)との相談

毎年退職者一人当たり五〇〇〇円を会に、そして会報(年二回)を三年間送付する。自動的に退職会会員とする。三年後に改めて入会をお誘い

東京都中

東京都公立中学校退職教頭・副校長会

代議員 相原 一矢

東京都公立中学校退職教頭・副校長会報告

一 会員数(平成三〇年四月現在)

三五三名(三〇年度入会者 三〇名)

全国会員数 四七名

二 年間の主な取り組み

(一) 会報の発行

(二) 幹事会

(三) 定期総会

(四) 研修旅行

(五) 自主研修

(六) 観桜会

(七) 全国公立学校退職教頭会事務手伝い等

(八) その他(東京都公立中学校副校長会定期総会への参加)

三 組織としての課題

・新規加入者の参加も増えてきてはいるが、会員総数の割には各会合の参加者が限定されつつある。

・教頭・副校長として経験してきたことを役立てる機会場所。

・教育現場との交流の機会(現職副校長職務の現状理解等)。

・新しい教育に関する情報収集。

・教育機器の研修。

その他(現職副校長の勤務実態)

平成二九年度の東京都の実態調査では、実質勤務時間が二時間以上の副校長が七八、三%(その内一二～一四時間が六二、五%)。年次有給休暇の取得日数が一～五日が、六〇、七%の現状である。



静岡県

静岡県公立学校退職教頭会

代議員 長屋 梅子

静岡県退職教頭会現状と課題

一 組織拡充・強化について

・新退職者への入会の勧めについては、異動の新聞発表後、本人宛勤務校にお誘い文書を発送したり、手渡したりしている。
・過年度退職者には、年齢の近い人や知人関係から接触している。

二 会報「静朋」の充実

・二十九年度は全地区に現職教頭会と交流を持つことを課した。第一歩として開かずの扉を開けること、面識を持つことからはじめようと声をかけた。さらに来年・再来年と継続の中で入会者を獲得していくことに繋げていく。

三 予算の関係

・予算の関係で年二回発行が一回となり、しかもカラーから白黒となり、非常に厳しいものとなった。それだけに会報としての役割、会員との連携など損ねることのないよう、発行時期盛り込む内容・ページ数等々十分留意し、充実に努める努力をしている。

・次年度からは、退職教頭会の存在・活動の内容等広く周知させていくために、現職教頭会全員に配布することに決定。

三 福利厚生

・県全体の事業として隔年による「生きがい展」(作品展

趣味、その他の発表の場)を実施。静岡と真ん中の県教育会館を会場に、退職教頭会の存在を知らしめることに効果を上げている。現職教頭の参加も可とし呼びかけている。

・各地区では交流会・旅行・物づくりの会・観劇会等事情に合わせて工夫している。

四 叙勲要請活動

・二七年度より会員の署名を添えて県教育委員会へ要請している。進展はないが、県教委の対応は年々柔軟になってきている。

・退職校長会・現職教頭会も、私共退職教頭会の要請を一項入れて応援してくれているとのこと、嬉しく、また力強く感じている。

五 社会貢献・教育貢献

・地域や各種団体の要請に応じて個人またはグループで、データーベース・茶道親子教室・コース指導・学習支援・クラブ活動支援等積極的に参加している。

課題

・退職後、働かなければならない現状の中で勧誘は難しくなってきた。

・現職の時から接点を持ち、交流を深めたいものの、あまりにも現役教頭の多忙のためか、場と時間の確保に苦慮している。最低、年一回は持とうとどの地区も頑張った。

双方が理解し合い、退職後の入会に繋げていくにはまだ時間がかかる。

・近年とみに社会貢献活動への奨励が叫ばれている。退職後も全体奉仕のために尽力している仲間が多いが実態が把握しにくい。実態調査などの方策を講じたい。

岐阜県

岐阜県公立学校退職教頭会

代議員 松橋 慎吾

各県の活動から

① 組織拡充にどのように取り組んでいるか

・岐阜⇒ 支部の激減、新任会員の入会率の低さ及び高齢会員(病弱、高齢、死亡)の増加に伴う会費収入が大減(三〇〇名有余名が、一五〇名以下に、約一〇年で激減し、会費免除者も激増)。

⇒ 「親睦会」の中身の工夫と「広報」の充実が、会の魅力の原点と考えて、組織拡大に取り組む。

⇒ 現役の事務局と退職の事務局が同一人物のため、四月下旬には、次年度の退職者名まで把握できる。

・富山⇒ 県下四地区から副会長を選出(「会長」職は、空席)。

⇒ 今年は、新人僅か二名(校長登用率が高い県)。

⇒ マイクロバスで研修旅行をして組織拡大を狙う。

⇒ 「弘済会」から補助金を頂く努力をしている。

⇒ 「現職教頭会」から補助金を頂き、活動資金に充てている。

・静岡⇒ 県下3地区から副会長を選出。
⇒ 現職の代議員会で入会のお願ひしたり、退職者の学校宛に勧誘文書を送付したりする。(人事異動の発表は三月末で、年度当初の学校現場準備が大変で勧誘のタイミングが難しい。)

・その他：⇒ 石川県は、「入会」から「オブザーバー」、そして「脱退」の動きであるが、あきらめず情報等を流し、仲間になつて頂く。

やはり、現役と同じく、東海七県(福井県、愛知県の入念)の組織化を考えていく。

⇒ インターネットで「辞令が分かる」時代に活動、取り組み方法の工夫に学ぶことがあるのではないか。



③ 活動の主なものから

・岐阜：⇒ 二支部内の交流の充実(岐阜四郡市と東濃五郡市)健太亜土句下院⇒ 貴重な県単独会員との接点の工夫 ⇒ 県全体の広報及び親睦会の充実(六五歳前後迄の方を焦点した新会員の増加のための根気な取り組 みと魅力ある内容の工夫

・富山：⇒ 一泊研修旅行が日帰り(ホテルイカミュージアムの見学)

⇒ 地域社会への貢献活動

・三重 ⇒ 親睦、研修、組織の三部門で活動の展開

⇒ 出前講座の活用(「風呂敷の活用法」)

・静岡 ⇒ 「現職校長会」と懇談

平成三〇年度 活動計画

一、目 標

各单位退職教頭会の実情に即した主体的な活動により、

会員相互が生きがいを感じて参加できるように、全国組織と県下各地の魅力ある活動を探り、「絆」のある楽しい会の活動を目指す。

二、活動方針

☆ 会員のより多くの参画を図り、会員相互の「趣味・特技」の交流を展開し、積極的な「親睦」の場を創造する。

☆ 「広報」活動の充実を図り、会員相互や地域社会・学校との連携を深める。

☆ 会費収入の減少を踏まえ、「節約」と「ボランティア」精神を醸成する。

☆ 「叙勲」についての現状等を理解し、全国的な活動を見守る。

三、活動計画

(一) 各地区(岐阜・東濃)の実情に合った活動内容を理解し、相互交流の機会を工夫し、具体的なふれあいの場を創造する。

(二) 一人でも多くの会員が参画できるように、文書交流、趣味・特技の交流等会員としての誇りと自慢のできる機会をつくる。

(三) 地域社会・学校との連携を深め、昨今の教育問題の解決の一躍を担えるような機会を工夫する。

A 広報の活動

(ア)年二回発行する「淡墨桜」の内容のさらなる充実に協力して頂けるような工夫に努める。機関紙「薄墨一〇〇号」記念特別号発行に実現の年とする。

(イ)その会報の編集に際しては、県退職教頭会員の歴史や昨今の地域の活動及び会員の生きがい活動等の積極的な投稿を頂けるように、具体的な提案をする。

B 生きがいの活動

(ア)親睦・連帯を深めるために、年二回〜三回程度の会を県全体行事や各地での交流を具体的に提案する

(イ)お互いの生活や体力の状況に応じた活動内容を工夫して(年齢、体力、趣味、特技、関心)、魅力ある機会を企画する。

(ウ)「地区懇談・懇親会」を通して、各郡市の魅力ある活動に触れるとともに、「会員の声」等を集約する場とする。

C 功労に対する活動

(ア)年度内に八〇歳を迎える会員に、「長寿祝い品」を贈り、功労を讃え合う。

(イ)会員死亡の折には、「礼詞」を贈り、規定による弔意・弔電を表し、生前の遺徳を顕彰する。

(ウ)国の叙勲制度の現状と会員の意思を把握して、見守るよう努力する。

D その他の活動

(ア)・国・県の行政機関や他団体と連携を進め、情報の収集・交流・要請等をする。

(イ)全国退職教頭会・東海北陸退職教頭会との連携を保つ。

(ウ)現職教頭会を支援し、交流を深め、各教育委員会等との連携をする。

島根県

島根県公立学校退職教頭会

代議員 森脇 光彦

島根県の現状

一、会員の高齢化と入会者について

本県では、地理的状況(東西に長く、高速道路が未整備)が悪く、また、退職者が少ない。入会勧誘 をしても入会しようにとする人は近年特に減少した。

そして、年金の関係により、退職後も再雇用により勤める人が多く、入会を躊躇している人が多い。入会者の減少は、会の士気に影響を与えている。

会員の高齢化が進んでおり、島根県では会員の多くが父母との同居者も多く、介護の負担、自己の健康管理を含めて不安を感じている会員もある。

二、運営状況

役員の交代にあたって、役職を受けて頂けない状態である。先に記した如く、島根県では道路事情が悪く、会議を開くに当たって出席に時間がかかる。よって西部からの役員の選出は出来ない。この状況から交代が出来にくい。松江市と出雲市から今まで役員を選出していたが、特に高齢の方が多くなり引き受けてくれる人がいなくなった。

例えば、会計の交替について、三年ほど前から八〇才を越えた方から交替を申し出られていたが、今年度の総会(二九年六月)までとお願いした。その後人選に努めた。適任

と思われる方もいたが、家庭状況・地理的状況から断念した。ついに会長が兼務することになった。

会長についても、島根県退職教頭会を立ち上げ、就任以来長期になった。また最近体調が優れず、交替をお願いし、手順を尽くした。ついに、引き受ける方もなかった。二月の役員会で来る六月の総会で、解散するも仕方がないのではないかとの話になった。そして、三〇年六月二一日(木)の総会で残念ながら解散を話し合うことになった。

しかし、折角支部を作ったのだから松江支部、出雲市支部、隠岐支部の三支部は、懇親会程度は出来るのでそのまま残そうということになった。

三、活動状況

平成二九年度総会・研修会

日時 平成二九年六月一七日(土)～一八日(日)

雲南市大東町 海潮荘

研修会

(一)講演

講師 毛利悦子先生

演題「二度とない人生だから」

(二)須賀神社参拝

和歌の発祥地として有名

(八雲立つ

出雲八重垣 妻籠みに
八重作る その八重垣を)

三重県

三重県公立学校退職教頭会

代議員 岡 英昭

平成二九年度 事業報告

一 役員会

四月一四日 第一回 総会について・退職者への入会

役員選考委員会

四月二四日 第二回 総会・親睦旅行について

七月一八日 第三回 総会の反省・専門部活動につい

て

八月二二日 第四回 専門活動報告について

九月二九日 第五回 親睦旅行について

二月 五日 第六回 事業報告・次年度総会

・三十周年について

三月三十日 第七回 次年度総会・三十周年・役員選

考委員会・会計監査

二、支部長会議

四月二四日 第一回 総会・親睦旅行

七月一八日 第二回 総会の反省・専門部会(会報・

研修会・親睦旅行)について

二月五日 第三回 事業報告 ・会報配布

三、定期総会

六月九日 午前 研修会三 重出前トーク「文化財の

魅力 発見！～なんてステキな三重 の文化遺産～」

四、全国代議員会

五月十六日・十七日(山口 県)

五、東海北陸理事會

六月十二日・十三日 (岐阜県)
六、専門部活動

四月二十四日 第一回 各部の組織作り

㊦ 研修部

五月十七日 総会時の研修会内容検討

六月 九日 三重出前トーク「文化財の魅力発見！
なんてステキな三重の文化遺産」

八月二二日 内容検討

一月十二日 役員支部長会研修内容検討

二月五日 伊勢講の跡を訪ねて

㊧ 広報部

六月六日 内容検討

十二月十四日 編集会議・校正

一月十八日 校正・印刷・製本

二月 五日 配布・発送

㊨ 親睦旅行部

八月二二日 行き先決定

十月二五日 法隆寺・大和郡山散策

7. 現職教頭会との連携について

十一月二十日 協力金依頼及び文書を郵送にて配布

広島県

広島県公立学校退職教頭会

代議員 上野 雅昭

退職教頭会理事会の報告 事務局長 藤原 幸治

三月八日、広島市の「アークホテル広島駅南」で中国地区退職教頭会理事会が開かれ、広島、岡山、山口、島根の四県から、十名が参加しました。

今回は、地元広島県の担当で、一年前から会場の予約や予算の計上、案内状の送付や資料の作成もありましたが、皆様のご協力で無事、終えることができました。特に、広島県からは、地元開 催ということもあり、六名の参加をいただき、ありが とうございました。

自己紹介ののち、交流協 議が行われました。各県の活動状 況の報告と今後の 課題について討議しました。

広島県からは、二九年度 の活動計画や広報委員会の「絆」を提出し、組織委員 会を中心とする新規退職者への加入取り組み、叙勲福利 厚生委員会の慶事の祝い、研修旅行、「新 春語ろう 会」の集い等を報告しました。

各県共通の課題としては、会員の高齢化等に伴う会員の減少を食い止め、新規会員の加入という組織の強化拡充をいかに進めるか等です。

今後各県の課題や工夫を持ち寄り、悩みや成果を交流して、いこうと確認しました。来年度は、山口市県 での中国理事会が開催される予定で、協力と再会を約 して 閉会しました。

組織専門委員会

一 四月八日の役員会で役員交代について審議した。
二 四月の配布物で全国広報誌と一緒に、「会費納入のお願い」文書を送付した。

三、五月二十日の第三十二回総会で役員交代について承認を受けた。

四、県総会で専門委員会開催。会員の加入状況と課題・取

り組みについて協議し、総会で報告した。
五、九月の配布物と一緒に、会費未納者に対して再度「会費納入のお願い」文書を送付した。

六、一月末〜三月に退職者加入促進の準備をした。
・各支部の組織専門委員、支部長さんへの依頼文と退職者加入へのお祝い、及び回答葉書を送付。

・新聞発表されたら退職者の名簿を作成し、事務局、各支部組織専門委員、支部長さんに送付。

七、各支部で新規退職者の学校へ出向き、直接会入会依頼をする。また知り合いの会員より加入の声かけをし、即答を得られない場合には、後日入会依頼をするために、可能であれば住所や電話番号を聞いておく。

八、各支部年間を通し、未加入者に加入の取り組みを行なう。

九、未加入者の中で知り合いの方がおられると、声かけや電話など入会の依頼をお願いしておく。

十、普段から、退職教頭会と現職教頭会との連携を密に行う。

広報専門委員会

「絆」一九号(九月)・二〇号(四月)を発刊しました。

当初目標としていた会員の方々の声や、情報交流の紙面を大切にして行くことを考えていました。二〇号での発刊ではできませんでした。今後、広報委員で話し合いを持ち、原稿の集め方、紙面の使い方など、会員の皆様に喜ばれる広報誌となるよう努力していきたいと思います。

叙勲福利厚生専門委員会

一、会員の慶弔に努めた。総会場で、喜寿、米寿、卒寿の慶祝の顕彰を行った。

二、会員親睦研修活動等の企画運営、親睦研修旅行を実施した。

日時：十一月十一日〜十二日

場所：鹿児島市内・桜島・開聞岳・指宿方面

参加者：十五人

三、新春「語ろう会」の集いを実施。

平成三〇年一月一三日(上)正午～会場は、広島の宿「相生」参加者が十人と例年よりは少ない会になりましたが、楽しい時を過ごしました。来年は、一月一九日(土)に行います。予定に入れ参加をお願い致します。

四、退職教頭の叙勲受賞の確保と推進全国公立学校退職教頭会と一緒に、文部科学省の方針・県教委の情報を得て、情報収集、要請活動を行い、粘り強く、支援体制作りに取り組み。



山口県

山口県公立学校退職教頭会

代議員 松岡 睦彦

☆☆第二九回親睦交流総会の報告☆☆

事務局長 小峰 義郎

山口県公立学校退職教頭会(かなめ会)交流総会は第二九回を迎え、去る、十月一九日(木)・二〇日(金)に萩 市の「千春楽」を会場として開催されました。ここは、菊ヶ浜海水浴場に隣接し緑鮮やかな松林と眼下に広がる砂浜を眺望できる素晴らしい会場でした。

今回は、第5地区(萩市・長門市)が引き受けて、第5地区の会員の方々が昨年から一年をかけて準備され、実のある総会にしようと努力されたことに敬意を払いと思います。

手厚いご配慮と心温まるお迎えをいただきました。会員四名の参加をいただき、盛会のうちに開催されました。

総会の前に生涯学習の一環として文化講演は元 萩市教育長先生の講演を拝聴いたしました。演題は「ネンピンころり」副題「朝顔にのぼるべとらしい水」でした。

総会では来賓として山口県公立学校教頭会会長先生(柳井市立柳井南中学校)のご臨席をいただきました。ご祝辞のなかで



現在、学校では新学習指導要領に伴う移行期での準備に追われていることと、学校を核とした街づくりが進められていることでした。

総会会場には、趣味のコーナーが設けられ小冊子コラム 集・竹細工・水墨画・掛軸・写真などの作品が展示されました。どれも素晴らしい作品で、会員の方から感嘆の声が聴かれました。

☆☆ 講演の概要 ☆☆

演題 「ネンピンころり」福題として「朝顔にのぼるべとらしい水」

講師 元萩市教育長先生

退職後は妻の病気の看病に当たりながら講演活動を続け、妻が亡くなった後も、全国各地で講演を行っています。映画「八重子のハミング」の原作者でもあります。

講演の概要

先生は、最愛の妻が若年性アルツハイマー病(罹患して 平均寿命は八年と言われている)に罹り、一二年にわたり 介護をした体験をもとに、介護の真のあり方や、それに携わる行政の対処について話されました。

アルツハイマー病(認知症)は大人が赤ん坊に帰っていき、くようなものでありますが、この病は発症して何年後には必ず死が訪れるものであります。妻も発症して一二年間 病と闘ったが、お迎えが来ました。この一二年間、どのような介護をしたのか、また妻に対してどう向き合ってきたのか、そこで学んだことは何か、それは常に赤ん坊に愛情をもつて接するようなものです。妻がおかしい言動をしても、注意したり、叱ったりせず、優しく褒めたり、同調したりすることが大切である。妻が最後まで穏やかに、過ごせるよう心掛けました。もちろんそれには家

富山県

族の協力と理解が必要、家族の優しさが一番の薬であります。妻が好きだった音楽(妻は音楽教師であった)を聞かせたり、家族と旅行に行ったり、スキップで安心させたりしました。病がすすむにつれて体力が衰え、やがて寝たつきりになっても、介護の姿勢は変わることはありませんでした。

介護をするうちに、自分も変わっていくし、周囲の人たちも強い絆で結ばれるようになりました。妻と過ごした二二年間が人生で一番充実した時期であつたように思います。

妻に礼を言つて最後の言葉とします。「妻よありがとう」で講演を終わられました。

○ 会員の減少と財政問題

会員の減少は今年度も続いています。昨年より二一名減の二五八名が会員として登録されました。それに今年度になつて五名の方がお亡くなりになり、十月二十日現在二五三名になりました。その原因は会員の高齢化が進み亡くなる方、退会する方が増えていること、それと新しく会員になられた方が少ないことです。今年度は教頭退職者二四名のうち一一名の方が入会されました。新しい会員を少しでも多くなるように現会員のご協力をお願いいたします。会員の減少は会費の減少につながり、財政を苦しめています。

もう一つの原因は防長保健センターが勧める火災保険への加入者がいないこと、また、加入している方の更改が少なくなつてきていること、手数料の利率が下がっていることなどが挙げられます。今後とも以上のようなことが続くと会費の値上げも検討しなければ、思っています。

人と人とのつながりを大切に

― 当会の現状を通して ― 副会長 有馬 淑子

先日、教え子のラインで「僕たちの小学校がなくなる」ということが話題になつていて驚くことを知った。少子化が叫ばれて久しいが、この子どもたちを担任していた時からの不安が、近い将来には現実になろうとしている。

社会現象の波は退職した私たちにも押し寄せてきている。様々な団体に所属し、地域でもボランティア的な存在として活動しているが、再雇用、高齢化等から、会員減少による担い手不足を痛感し、今まで意識せず、人が人を支えてきたことを改めて知る思いである。

この現状の中で、今まさに二人の新入会員を迎えた。朗報である。会員一同ささやかな幸せを感じ、元気をいただいている。共に歩み、魅力的な会を目指していきたい。

さて、昨年度、組織改革をしたことが、二つある。一つは、副会長四人が半年ずつ会長代行(二九年度前半は有馬、後半は石野)を務めること。もう一つは四委員会から二部会制(総務・福利)としたことである。福利では、一泊研修から日帰りへと参加しやすい工夫がなされた。そこでは、共通の思いや感動した心が自然に会話を導き、会員同士の距離が縮まったように感じる。

一方、総務では、二九年度から会報「たちやま」を年一回の発行とした。ページの削減や、手刷りなどでは収入減を補えず、申し訳なく思います。内容をより充実し、会員の皆様の様子なども

お届けする予定です。

会を継続し支える皆さんの献身的な姿に心をうたれます。人と人とのつながりを大切に、ゆつくり絆を深めていこうではありませんか。

東海北陸公立学校退職教頭会役員・理事会 (岐阜大会)

平成二九年度東海北陸退職教頭会役員・理事会は、六月十二日(月)岐阜市で開かれた。

組織・広報・叙勲・全退教・その他について意見交換した。各県報告の骨子のみ記載。

静岡 県教委への叙位・叙勲要請訪問(三十分)を行った。四名の加入者があつた。年二回発行のカラー刷り会報をモノクロで一回にした。

岐阜 加入者が減少している。叙勲要請の活動はしない方針。会報は、楽しく読めるものとなるよう工夫。年二回発行で、もうすぐ一〇〇号。

三重 親睦会は主に県内で年一回行っている。会報は、会員から投稿の随筆などを載せ、年一回発行。今年四名の加入者あり。

富山 叙位叙勲の要請活動をしないことになった。年二回発行していた会報を、年一回にした。一泊の親睦会を取りやめ、日帰りにした。二名の加入者あり。

(庶務 森 重二)



熊本県

熊本県公立学校退職教頭会

代議員 徳永 信雄

(一)組織の維持と拡充について

組織の拡充というより、現在の組織をどう維持していく
かが大きな課題である。会員の減少に歯止めがかから
ない。又、近年、退職者の県退職教頭会への加入者は大変
少ない。それで従来の新規加入者の取り組み方を反省、

協議をし、前年度退職者と今年度退職予定者全員に年賀
状や、県退職教頭会への加入の案内状や食事会等を実施。

組織委員長始め、役員・会員一同会員の新規加入へ試行
錯誤しながら、一生懸命に取り組んでいる。

県退職教頭会への加入者は平成二八年度は退職者三六名
中四名、二九年度は退職者一八名中三名、三〇年度は退職
者三〇名中二名。このような加入の状況で本当に淋しいも
です。

年金の完全支給の課題・再任用で再度勤務する者等。
個人々人によって色々事情はあるとは思いますが、このような事情
で県退職教頭会への加入者が少ない事も理解できない訳でも
ないが、それにしても加入者が大変少ない。

今の若い世代は我々年配の方とは価値観が違っており、
価値観の相違が加入に大きく影響しているのではないかと
考えられる。会員の死去・病气等の理由で個人の退会者が

近年多く、入会者は少なく、会員は年々減少している。会員
が年々高齢化していることで、仕方のないことかもしれないが、
今後、一体どうなるのか。先が思いやられる。

(二)福利厚生と研修について

年度始めにスタートの会として四月上旬に熊本城で花見
簡単な懇親会を実施。一日研修では平成二八年度は西南戦争
の激戦地田原坂公園。二九年度は世界遺産である万田坑とい
うように県内の主な名所史跡を研修。又、春・夏・秋年三回の
パークゴルフ大会。夜は熊本市内の居酒屋で懇親会を実施。
会員の研修と交流を深めている。

慶弔関係では、弔電・弔辞・できる限り葬儀への参加、喜寿・
米寿・白寿の方へ賞状と記念品の贈呈をし、本人・家族の方か
ら大変喜ばれている。その他、パソコン・ゴルフ・パークゴルフ・囲碁
等の趣味の会等を実施。会員の親睦と交流を盛んにしている。

編集関係では委員長・委員もパソコンが大変上手で、手作り
による会報を年2回発行している。記事・内容とも素晴らしい
会報で会員から大変好評を得ている。

(三)叙勲問題への取り組みについて

叙勲の要請活動は、熊本県だけでなく、全国退職教頭会
・他都県・他機関等と連携しながら、根気強く継続してい
くことが大切である。数年前までは毎年、県教育庁教育政策
課に会長他・役員数名で二月中旬に叙勲の陳情に行ったが
現在は中止している。

(四)魅力ある退職教頭会にするためには魅力・活気ある県

退職教頭会にするためには福利厚生と研修が大切だと考え、
次のように力を入れている。

従来の懇親会は四月の花見やパークゴルフ後の簡単な昼食
会程度の懇親会であったが、現在は熊本市内の居酒屋で会員の
親睦と交流を兼ねた懇親会を実施している。又、四月には新会
員の歓迎会を実施している。

佐賀県

佐賀県公立学校退職教頭会

代議員 吉村 レイ子

一、全国大会開催決定までの経過

全国大会開催を五年ほど前から佐賀県へ要請されていたが、
諸事情によりお断りしていた。二七年十月、九プロ佐賀大会に
山浦会長が出席され、その礼に尽くすべく、二八年五月代議
員会・東京大会に出席した。

その会議でショックを受けたのは、急激な会員数減少であった。
東京大会の様子をありのまま報告後、役員会、理事会と真剣
な討議を重ね、佐賀大会を申し出た。

決定理由は、以前から要請があつていたこと、山浦会長の九州
大会への参加、三十年の九州大会当番が佐賀であること、佐賀県
退職教頭会の創立に関わられた九十歳前後の先輩の方々数名か
ら要望の声があつたこと等です。

二、組織の維持と拡充

(一) 新会員の加入

佐賀県は一〇〇名前後の会員数を保っている。

左記の表は、平成二五年度から六年間の新会員の加入者数と割合を示している。加入者総数は二九名。対象者総数は八九名だから、三三%の加入率である。

この間の会員死亡者は二五名で加入者の方が多かった。

特に、加入者の多かった二五・二六年度は、勧誘パンフレットを作つて活動内容や魅力を具体的に伝わるように工夫したり、対象者の元同僚や知人友人でグループを作つて勧誘活動を粘り強く行ったことが功を奏したようだ。

二七年度は二月までの取り組みが遅かったり一人で働きかけたので熱意が伝わらなかつたと反省した。二八年度は一月と二月にグループ二人以上の勧誘活動が余裕を持つてできるように準備を進めたが残念な結果になった。その原因は再就職やゆつくりしたい等で加入しないとされるケースが増えたこと。二九・三〇年度も同様の傾向が見られる。

この六年間で加入事例を分析すると、
 ① 元同僚や知人友人の声かけでの加入者が一番多かった。
 ② 佐賀の場合、七十歳以下の若い会員が四十名(男二十六女十四)と多い。しかも本部役員、理事、監事、総会の講師等として活躍している。これが会を活性化し加入活動にも良い影響をもたらしていることがわかった。
 (二) 会則の一部改正

○退職教頭の楠和会加入者数と割合

年度	対象者数	加入者数	割合(%)
25	8	6	75
26	15	10	67
27	11	2	18
28	16	3	19
29	15	4	27
30	24	4	17
計	89	29	33

組織を維持していく上で重要なもう一つの視点は、歳入と歳出のバランスである。本県では米寿会員に達したら会費全額免除の規約があった。しかし、財政上の厳しさから、それを二八年五月に半額免除に変え、二千五百円にした。同時に、慶弔規定の香典を一万円から五千円へ変更した。変更については四年スパン(平成二八〜三二年度)で計算した歳入歳出を提示、総会で審議され了承された。該当先輩諸氏からは会発展のため全額払いたいという温かいご意見も多数あった。おかげで今年度も、従来通りの活動で歳入歳出のバランスを保った安定した事業運営ができています。

三、福利厚生と研修
 ベースにあるのは魅力ある退職教頭会づくり。そのために佐賀県では二〇一〇年に全員総活躍の三専門部活動を導入した。三専門部は、年間の三大行事と直結する懇親旅行部、新年宴会部、広報部である。年を重ねる毎に各専門部には英知が蓄積され、会員一人ひとりの意識化も高まり各活動も活発化した。その一環として、二〇一五年広報部より「創立二五周年記念誌」が発行される運びとなった。

平成二九年度の年間事業は以下のとおり。定期総会および新入会員歓迎会、(講話)「現在の教育情勢」、(講話)「優しく美しく出会いと縁の妙」…
 従来講話は先輩の先生に学ぶとして、現職〜退職後を通じて心に残る講話を一人からいただいていたが、今年度から「教頭は常に学ぶべきである。学ぶものにのみ教える資格あり」いう先輩の言葉を重く受け止め、教育関係事務所に勤務されている現職の仲間を講師に、最近の教育行政の変化や子供の実態について学び好評を得た。

懇親旅行部企画の親睦を深める夏の一泊二日の懇親旅行(二九年七月三十日〜三一日、有明海、大・ハラマ原城温泉の旅)／一月の新年宴会は絵画、写真、書等の作品展と趣味や演芸の披露等。すべてが会員の知と汗の結晶で生まれ、計画され引き継がれている。二年毎に専門部委員は変わり、新しいアイデアが生まれ、活動は面白くなっている。ここ数年は若い方々の力も注がれ、退職教頭会に入つてよかつたという声も聞かれる。継続は力なり。変化の激しい時代に、将来を見据えたビジョンを持ち会則や制度の見直し、知恵を出し合い改革してきた。これからも行事への参加や活動を通して、互いの健康と長寿を確かめ合い、元気を喜び合う会にしていきたいと思う。

四、叙勲問題について
 東京大会 での「叙勲要請活動」に関わる追加資料によれば、過去の受章者数に「平成一九年度以降は、受章者なし」とある。叙勲問題への取り組みは遠い存在に思われた。本来ならば同じ管理職として、多大な労苦を惜しみなく費やした過去を忘れることなく、叫び続け語り継がねばなるまいが、せめて、「全退教表彰」を考えてみるのも一つの方法ではないかとも思う。



そこで、今回佐賀県から功績を考慮して五名(上野廣文・小林徹・村田英次・田中誠之・原岡実、敬称略)を推薦している。
 五、魅力ある楠和会退職教頭会、誰もが入りたくなる楠和会になるために

(一) 若い会員を増やすことで魅力ある退職教頭会になる。そのために以下のような取り組みをしている。

① 現職教頭会理事会年度最後に出席。勧誘パンフレットを六十部用意し、それをもとに楠和会(退職教頭会)の魅力ある活動を伝える。



- ② 退職予定教頭の情報を入力し、一月下旬～二月中旬、役員、理事、若い会員等数名で該当教頭への学校訪問。勧誘は電話、手紙、会員による呼びかけなど型どおりでなく、誠意ある言動がポイント。
- (二) 定期総会後の歓迎懇親会への招待
- (三) 専門部活動の定着(前述の二〇一〇年導入「全員総活躍の三専門部活動」の定着)

※ひとこと

全退教の研修のあり方、会の持ち方、会費など、このままでいいのだろうか。将来を見据えた研修会のあり方等について役員の皆様や、会員各位のご意見をグループ討議をして知恵を借りたい。

会長表彰

〈佐賀大会で「感謝状」を差し上げた方々〉
全退教関連

福岡 トキ子 様 (岡山県前会長)
佐賀県支部関連

上野 廣文 様 (佐賀県元会長)
小林 徹 様 (佐賀県元会長)

村田 英次 様 (佐賀県元会長)

田中 誠之 様 (佐賀県元専門部長)

原岡 実 様 (佐賀県元専門部長)

〈秋田県三十周年で「感謝状」を差し上げた方々〉

佐藤 健一 様 (秋田県元会長)

吉田 静夫 様 (秋田県元会長)

富樫 清視 様 (秋田県副会長)

〈島根県総会で「感謝状」を差し上げた方々〉

森脇 光彦 様 (島根県会長)

道橋 健一 様 (島根県副会長)

石飛 明宏 様 (島根県副会長)

森脇 勇 様 (島根県事務局長)



平成30年度 全国公立学校退職教頭会組織表

未組織県会員の世話人

NO	役職	氏名
1	奈良県 世話人	梅田 芳三
2	新潟県 世話人	松崎 圭四

未組織県会員のいる県

NO	県名
1	北海道
2	青森県
3	山形県
4	岩手県
5	栃木県
6	茨城県
7	埼玉県
8	千葉県
9	愛知県
10	新潟県
11	神奈川県
12	奈良県
13	京都府
14	大阪府
15	和歌山県
16	福井県
17	鳥取県
18	大分県

NO	役員	氏名
7 岐阜	会長・代議員	松橋 慎吾
	事務局長	山田 和一
	事務局	山田 和一
8 富山	会長・代議員	山本英二子
	事務局長	森 重一
	事務局	森 重一
9 石川	会長・代議員	勘村 武夫
	事務局長	金崎 誠一
	事務局	金崎 誠一
10 三重	会長・代議員	岡 英昭
	事務局長	西野 行平
	事務局	黒田 敦子
11 滋賀	会長・代議員	三谷 誠一
	事務局長・事務局	
12 島根	会長・代議員	森脇 光彦
	事務局長	森脇 勇
	事務局	森脇 勇
13 岡山	会長・代議員	津内 正一
	事務局長	黒瀬 敏彦
	事務局	田邊 由喜
14 広島	会長・代議員	上野 雅昭
	事務局長	藤原 幸治
	事務局	藤原 幸治
15 山口	会長・代議員	松岡 睦彦
	事務局長	小澤 義郎
	事務局	森本 園枝
16 徳島	会長・代議員	大石 正
	事務局長・事務局	
17 愛媛	会長・代議員	野本千壽子
	事務局長	山本多榮子
	事務局	平野 和美
18 長崎	休会	
	事務局長	草野 由理
19 佐賀	会長・代議員	吉村レイ子
	事務局長	内山 秀治
	事務局	内山 秀治
20 熊本	会長・代議員	徳永 信雄
	事務局長	吉住 次郎
	事務局	前田健次郎
21 沖縄	会長・代議員	野原 清志
	事務局長・事務局	

NO	役員	氏名
1	顧問(全公教会長)	杉江 淳一
2	顧問	中込 武夫
3	顧問	荻野 由男
4	会長	山浦 朝日
5	副会長	武田 寛
6	副会長	川島 孝一
7	副会長	福岡 健
8	事務局長	須山 道雄
9	会計	西川 順
10	会計	大西 規子
11	庶務	相原 一矢
12	庶務	大根田 芳明
13	庶務	吉田 一義
01	北海道地区理事	未選出
02	東北地区理事	未選出
03	関東甲信地区理事	未選出
04	東海北陸地区理事	岡 英昭
05	近畿地区理事	三谷 誠一
06	中国地区理事	松岡 睦彦
07	四国地区理事	未選出
08	九州地区理事	徳永 信雄
01	監事(東)	小田木 好
02	監事(西)	土谷 一治
1 秋田	会長・代議員	豊島 鈴子
	事務局長	山内 幸子
	事務局	山内 幸子
2 福島	会長・代議員	丹治 和美
	事務局長	西坂 敏夫
	事務局	松浦 清
3 群馬	事務局	安斎 博喜
	会長・代議員	篠田 昭一
	事務局長	黛 典周
4 東京小	事務局	黛 典周
	会長・代議員	野沢 宏治
	事務局長	宮崎 博佳
5 東京中	事務局	吉田 一義
	会長・代議員	相原 一矢
	事務局長	福岡 健
6 静岡	事務局	福岡 健
	会長・代議員	長屋 梅子
	事務局長	豊田 勝宏
	事務局	豊田 勝宏

研修部便り

各支部の会長様並びに会員の皆様のご

協力により、研究・研修誌「教育徒然集」(第三集)を発刊し、七月にお送りすることが出来ました。お読みいただけたでしょうか。

第三集では、佐賀県支部の大きな働きにより、「教育徒然集」の冒頭に佐賀大会で行われた記念講演を掲載でき、研究・研修誌としての体裁をさらに整えることが出来ました。

今回お送りした「会報六七号」にも、短く要約した講演内容を載せてあります。幕末であっても、現在の先進的な教育にも劣らない素晴らしい実績をあげられた佐賀藩主の人づくりがよくわかる内容となっております。ご一読ください。研修部では、現在、「教育徒然集」(第四集)の発行に向けて活動を開始いたしました。

「教育徒然集」の発行には、皆様積極的な寄稿が必要です。募集にあたっては、形式を設けてありますが、日頃思っていること、ふと感じたことなどを思うままにお書きください。短い原稿でも結構です。ぜひ、ふるってご投稿ください。

原稿形式は、40字×36行(1,600字)

(内、6行は、題名・執筆者名)

短い原稿でも結構です。横書きでお願いします。

事務局便り

事務局長 須山 道雄

平成三〇年

度 全国公立
学校退職教頭

会代議員会佐賀大会は五月一六日〜一七日に佐賀県の「ホテルグランデはぐれ」で盛大に開催されました。

大会に参加下さいました支部、都合で参加出来なかった支部もありましたが応援をいただきありがとうございます。次年度はより多くの支部にお集まりいただき開催できますように心から祈っております。

今回の大会は、徴古館主任学芸員 TK氏による記念講演も行われ、とても充実した大会となりました。

また、「会員減や高齢化 全国の課題議論」という見出しで、大会の様子が五月二〇日の佐賀新聞にも取り上げられました。

確かに、各支部の懸命な努力や取り組みにもかかわらず、現在の会員数は、一〇年前と比べると、おおむね半減しているのが現状です。特に、ここ数年、退会する支部や休会する支部もあります。

そこで、今まで会員を増やすことに重点的に取り組んできましたが、これからはいかに組織を退会や休会させず、維持するかが重要な課題になってくると思います。

感謝状は、長らく岡山県の会長として尽くされた福岡トキ子氏に贈呈しました。また、佐賀県支部に尽力された上野廣文氏、小林 敏氏、村田英次氏、田中誠之氏、原岡実氏の五名にも贈呈させていただきました。

役員承認では、津内正一監事が監事を降り岡山県の会長になり、代わりに土谷一治監事が就任されました。

六月一四日〜一五日に秋田支部の「三〇周年記念式典」

が開催され、山浦会長が参列して、佐藤健一氏、吉田静夫氏、富樫清視氏の三名の功労者に「感謝状」をお贈りしました。

大会の中で討議された「要請書」に関しては、大会の総意を込め、本部で「全国公立学校退職教頭会の願い」という案文を作成し、各都県の会長様にお送りしました。各都県支部の役員会等で話し合いの上、本部までご意見をお寄せ下さるようお願い申し上げます。

次年度の代議員会は、秋田県で開催されます。より多くの支部にお集まりいただき開催できますようご協力をお願いいたします。

なお、秋田大会以降、開催計画のある支部は全国公立学校退職教頭会長 又は、事務局長までお知らせください。よろしく願います。



代議員会 会場の様子

秋田で お待ちしております

秋田の春の山々は今、萌黄色・鶯色・若芽色・鮮緑・花緑・青深緑等々、緑の大合唱に包まれております。

そんな中であつて「私もいるわ。」とそつと存在を訴えているのは淡いピンクの山桜。その花を愛でるだけではなく秋田の人々はその樹皮を使い樺細工を生み出し、薄く削った杉の板から曲げわっぱを生み出す等、自然を巧みに生活の中に取り込み豊かな生活をしてきました。最近では一躍、秋田の名を世界に…、フィギュアスケーター、ザギトワさんによる愛くるしい秋田犬、温厚で強く賢く粘り強い、それは忠犬ハチ公としても広く知られているところです。新幹線で秋田にお見えの際には、きつと秋田犬が皆様を迎えてくれることでしょう。

平成三十一年度、全国公立退職教頭会代議員会は、秋田での開催となりました。若い方たちの「是非、秋田で・」を受けたものです。小さな会ではありますが、会員一同、心から皆様のお越しをお待ちしております。今から、どうぞ予定表にお書きいただきたいと思います。

その秋田の全てを見事なまでに歌い上げてくれている素晴らしい歌があります。それが『秋田県民歌』です。自然を歌い上げ、豊かな資源をそして歴史を語り、最後は秋田県民の心意気を…とまとめ上げております



「秋田県民歌」

作詞 倉田政嗣 補作 高野辰之 作曲 成田 為三

一、秀麗無比なる鳥海山よ 二、廻らす山山靈気を込めて

狂瀾吼えたつ男鹿半島よ 斧の音響かぬ千古の美林

神秘の十和田は田沢と共に 地下なる鍍脈無限の宝庫

世界に名を得し誇りの湖水 見渡す廣野は滯茫霞み

山水皆これ 詩の国秋田 黄金と実りて豊けき秋田

三、篤胤深淵巨人の訓え

久遠に輝く北斗と高く

錦旗を護りし戊辰の栄は

矢留の城頭花とぞ薫る

歴史は香し誉の秋田

四、民族選れて質実剛毅

正義と自治とのさとしを体し

人材遍く育みなして

燦たる理想に燃え起つ我等

至純の郷土と拓かん秋田

西日本豪雨について

この度の豪雨災害では、被災された会員の方も居られることと思います。心より、お見舞い申し上げます。広島県、岡山県、愛媛県の三支部につきましては、些少ですが、本部より、『お見舞い金』を送らせていただきました。

会長 山浦 朝日

平成三十年八月三十一日
全国公立学校退職教頭会

東京都港区愛宕1-6-7

愛宕山弁護士ビル403号

発行責任者

会長 山浦 朝日